

日本國天皇家論

4章 壬申の乱

日本國天皇家と九州天皇の内戦

壬申戦記の解析

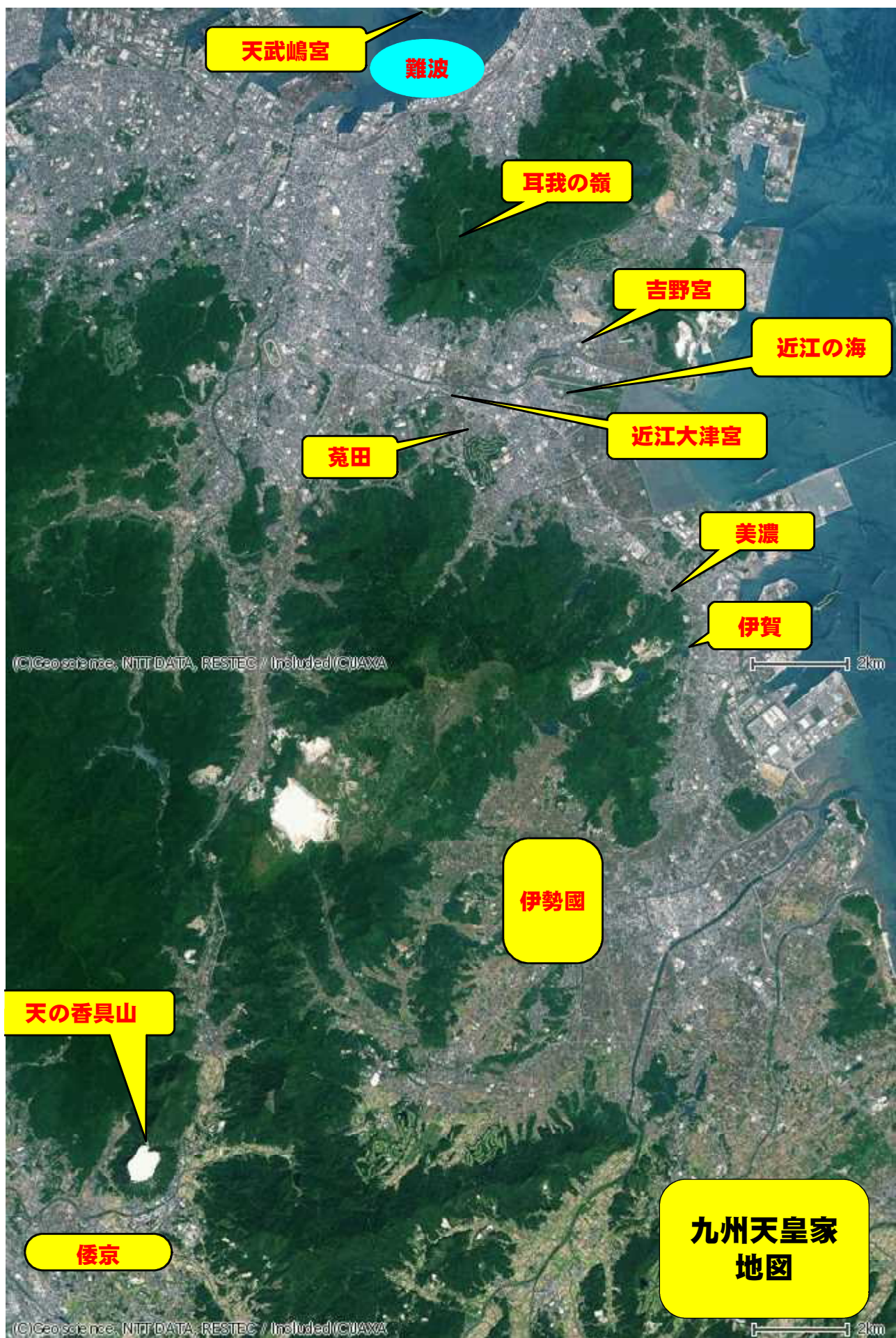
壬申の乱は九州天皇家天武の乱である。その戦いの場所は八世紀に確立した令制國の「伊勢」「美濃」ではなく、九州天皇家の「伊勢」「美濃」であった。この乱に勝利した天武が日本の王(天皇)となったのである。

- 5月 朴井連雄君(えのいのむらじのきみ)、朝廷の陰謀を天武に通知。或る人^a 近江京より倭京に至る道、各所に監視人を置いている。亦宇治の守橋者に「天武への食糧を運ばさないように命令している」と言う。
- 6・22 村国男依(むらくにをより)・和珥部臣君手(わにべのおみきみて)・身毛君廣(むげつきみひろ)三人を^b 美濃國 に派遣、挙兵を命ず。
天武天皇、「^c 不破道を塞げ」と命ずる。
- 6・24 天武天皇、^d 大分君恵尺(おほいたのきみえさか)・黄書造大伴(きふみのみやつこおほとも)・逢臣志摩(あふのおみしま)を倭京留守司高坂王(とどまりまもるつかさたかさかのおほきみ)の下に派遣して、駅鈴(うまやのすず)を乞う。
近江の高市皇子・大津皇子に挙兵を通報し、「^e 伊勢に逢え」と命令する。
天武、出発。その日に菟田の吾城に入る。従う者は二十人余人、女子ども十余人。亦美濃王を徴(め)す。菟田の郡で、湯沐の米を運ぶ伊勢国の駄(にほひうま)50匹と出会い、乗る。大野で日没。
夜中に隠(なばり)郡に至り、隠驛家(なばりのうまや)を焼いて暖を取る。夜を徹して歩く。
- 6・25 早朝伊賀の郡に至る。あけぼのに荊萩野(たらの)に到って朝食をとる。
積殖(つむえ)の山口で高市皇子、近江より至る。大山を越えて伊勢鈴鹿に至る。鈴鹿の山道を塞ぐ。
夜、伊勢三重郡に達す。家を焼いて暖を取る。
- 6・26 朝、^f 朝明(あさけ)郡で天照大神を望拝する。
大津皇子、近江より至る。美濃の挙兵成功、高市皇子を不破に派遣、また東海・東山両道の兵を發す。
^g 天武、伊勢桑名郡に至る。
近江方、諸方に募兵使を發す。葦那公磐鋤(いなのみきみいはすき)・書直葉(ふみのあたひくすり)・忍坂直大摩侶(おしさかのあたひおほま)を東国に派遣。穂積臣百足(ほづみおのみももたり)・弟五百枝(おとといほえ)・物部首日向(もののべのおびとひむか)を倭の京へ派遣。
近江方、佐伯連男(さへきのむらじをとこ)を筑紫に、樟使主磐手(くすのおみいはて)を吉備國に遣し挙兵を促す。^h 筑紫太宰及び吉備国守を味方に引き入れようとしたが失敗。この夜、東國への使者は不破で高市皇子方の伏兵に捕られる。
大伴連馬來田(おほとものむらじまぐだ)・弟吹負(いろどふけひ)、ⁱ 倭 の家に退る。
倭の大伴吹負、天武側で挙兵を企て、軍勢を集める。
- 6・27 天武天皇、不破に進み野上の行宮をおこす。
尾張国司小子部連鉏鉤(ちひさこべのむらじさひち)、二萬の軍を率いてくる。
- 6・29 大伴吹負、挙兵して倭京・飛鳥を占拠。留守司高坂王を配下にする。

- 吹負、大伴連安麻呂等を不破に派遣、天武に報告。天武天皇、大伴吹負を将軍に任命。
三輪君高市麻呂・鴨君蝦夷等、群の豪傑しき者、大伴吹負に従う。
- 7・1 大伴吹負、近江に進撃せんとし、乃楽に向かう。吹負、**j 河内方面の近江軍**防衛のため諸道に兵を配置。坂本臣財・長尾直眞墨・倉嶋直麻呂・民直小鮪・谷直根麻呂を龍田に、復佐味君少麻呂を大に、鴨君蝦夷を石手道に派遣、守らせる。
坂本財ら、近江軍の拠る高安城を占領。
- 7・2 天武天皇、紀臣阿閉麻呂・多臣品治・置始連菟、数万を伊勢の大山を越えて倭京に向かわす。また、村国男依・書首根麻呂・和珥部臣君手・膳香瓦臣阿倍、数万を不破から出て近江に出撃。また別に、多臣品治を荊萩野に駐屯さし、田中臣足麻呂に倉歴道を守らす。
近江朝、山部王・蘇賀臣果安・巨勢臣比等数万を、不破襲撃のため、「犬上川」に集結さす。しかし、内部分裂し、山部王は蘇賀果安・巨勢臣比等に殺される。進軍できず。近江将軍、羽田公矢國、投降。果安、自殺する。
坂本財ら、近江方の将壱岐史韓国の軍と「衝我河（えがのかわ）」に戦い、敗れて懼坂（かしこさか）の陣による。
- 7・3 大伴吹負、「乃楽山」に駐屯。「古京は是れ本の宮の處なり」との進言を入れて、赤麻呂・忌部首人を派遣して「古京」を守らす。
- 7・4 大伴吹負、「乃楽山」で近江方の将大野果安と戦い敗戦。**果安追跡して0「古京」にいたるも引き返す。**
大伴吹負、東方からの置始菟の救援軍に会い、引き返して「金網井（かなづな）のい」に駐屯。
「河内」方面から侵入した近江方の壱岐史韓国の軍と「當麻（たぎま）」に会戦、「来目」の活躍で、「韓国」を破る。この後、伊勢からの救援軍多数、倭京に到着し、上中下道に分かれて駐屯。中道において**「近江」犬養連五十君軍の別将廬井鯨と大伴吹負軍衝突。**
三輪君高市麻呂・置始連菟、上道にて「箸稜」で戦う。近江軍を破る。「鯨」逃げる。
近江軍を大破し、これ以降近江軍攻めて来ず。
- 7・5 **近江方の別将田辺小隅、「倉歴」に駐屯する田中足麻呂の陣を奇襲。**
- 7・6 **小隅、進んで「荊萩野」の多品治の陣を襲うも撃退される。**
- 7・7 村国男依等、近江方の軍と「息長の横河」で戦い、近江方将境部連葉を殺す。勝つ。
- 7・9 村国男依等、「鳥籠山」の近江軍・秦友足を破る。天武軍、**k 東海将軍** 紀臣阿閉麻呂等、置始連菟千余騎を倭京の将軍大伴連吹負の救援に向かわす。
- 7・13 村国男依、「安河（やすのかわ）」で近江軍を大破。社戸臣大口・土師連千嶋を捕らえる。
- 7・17 村国男依、「栗太（くるもと）」の近江軍を破る
- 7・22 村国男依等、瀬田に至る。大友皇子及び群臣、橋の西に駐屯。
1 瀬田橋の合戦、大分君稚臣の活躍で橋を渡り、大友皇子、左右大臣等逃亡。
近江の将、犬養連五十君及び谷直鹽手を栗津に斬る。
大伴吹負、「倭」を平定し大坂を越えて **m 難波に至る。**
配下の別将は倭（やまと）から三街道より北上、「山前」の河の南に駐屯する。
- 7・23 村国男依等、残敵を討伐。**大友皇子、「山前」に自殺す。**
- 7・24 諸将軍、筱浪（ささなみ）に集い、左右大臣及び罪人を追捕。
- 7・26 将軍ら「不破の宮」にいたり、大友皇子の頭を天皇に献ず
- 8・25 重罪人八人を極刑。右大臣中臣連金を浅井の田根に斬る。
左大臣蘇我赤兄・大納言巨勢臣比等、及び子孫、併せて中臣連金の子、蘇我臣果安の子、配流。
- 9・8 伊勢・桑名泊。 9・9 鈴鹿泊。 9・10 阿閉泊。 9・11 名張泊。 9・12 倭京・**n 嶋宮**

以上が日本書紀が記す壬申の乱の戦記である。この戦記の舞台は関西ではない。古代天皇家が存在した北九州である。これらの史実を私たちが解明した古代北九州天皇家の地図によって解析していこう。

壬申の乱・九州天皇家の地図



戦記解析

(a) 近江より倭京への道

九州天皇家において「近江」とは淡海、つまり小倉南区曾根の海をさす。近江大津宮は小倉南区長野に存在した九州天皇家の宮であった。「倭京」とは神武が都を開いた畝傍山の麓、香春町をいう。近江から倭京へのメイン街道は国道10号線だった。この街道は周防灘に沿った東海道である。



(b) 美濃は古代美濃国

今聞く、近江朝廷の臣等、朕が為に害はむことを謀る。是を以て、汝等三人、急に美濃国に往りて、安八磨郡の湯沐令多臣品に告げて、機要(はかりことのぬみ)を宣ひ示して、先づ當郡の兵を發せ。仍、国司等差に経れて、諸軍を差し發して、急に不破道を塞げ。朕今發路たむ。

天武が先ず発した命令は「美濃国で兵を起こすこと」「不破道を塞ぐこと」であった。美濃、不破はいずれも九州天皇家の地名である。美濃は「三野」または「美努」とも書かれている。美濃とはどこか。古事記にこの地名が現れている。

是を以ちて驛使を四方に班ちて、意富多泥古と謂う人を求めたまひし時、河内の美努村に其の人を見得て貢進りき。
(古事記・崇神記)

古代「美努(美濃)」の所在地を本来の場所で記録しているのは古事記・崇神記である。ここには「美濃は河

内にあった」ことを記している。九州天皇家で「河内」と呼ばれた地方は小倉南区・大野川、貫川、朽網川の流域である。壬申の乱において主要な戦場となった「美濃」は河内地方の苅田町に存在した地名である。

天武は村国男依(むらくにをより)・和珥部臣君手(わにべのおみきみて)・身毛君廣(むげつきみひろ)の三人の重臣を美濃國に派遣して挙兵を命じた。何故天武は美濃で挙兵を命じ、不破道を防げと命じたのか。美濃が蜂起の成否の鍵を握る國だったからである。蜂起が成功するか否かはひとつに天武の脱出に懸かっている。天武が捕らえられてしまえば全て終わる。何よりも脱出経路の安全を確保しなければならない。この心配を一人の臣が忠告している。

近江の群臣、元より謀心有り。必ず天下を害らむ。則ち道路通ひ難からむ。何ぞ一人の兵無くして、徒手にして東に入りたまふ。臣恐るらくは、事の就らざらむことを。

ここでいう「近江の群臣」とは「近江朝廷」である。「近江朝廷」とは琵琶湖近江の朝廷をいう。滋賀県近江の朝廷大友王の兵が道を封鎖して行き来できないようにしている。天武には一人の兵もない。どうやって東(あづま)に行き着くことができましょうか。

天武脱出の要所に位置していた國が古代美濃であった。美濃の安八磨郡には「湯沐令多臣品」がいる。ここまで無事にたどり着けばその先は安全に進むことが出来る。天武の目的地は美濃ではない。その先の伊勢である。美濃は伊勢國への途中に位置する郡である。故に天武は先ずどこよりも美濃で兵を挙げこの要所を確保しろと命じたのである。天武の命令は的を射た一刻を争うの軍事命令であった。不安な天武一行が日没を迎えた「大野」は小倉南区に「大野川」の名前として残っている。

(c)「不破道を塞げ」……急場の戦場

仍、国司等に経れて、諸軍を差し發して、急に不破道を塞げ。朕今發路たむ。

天武の指令第一号は不破道を塞げということであった。何故不破道を閉鎖する必要必然があったのか。天武は不破道を通して伊勢に向かうとしたからである。目的地は伊勢。伊勢に行くには不破道を通らなければならない。近江朝廷は天武脱出を知って追っ手を差し向けてくるであろう。出家して世を離れながら叛旗を翻すとは。近江朝廷軍は必ず追ってくる。その場合彼らは不破道を通して追いかけてくる。まず不破道を確保しろ。不破道を封鎖しろ。これが天武の軍令の意味であった。

天武が蜂起の拠点としたのは伊勢であった。天武一行が吉野から伊勢へ抜けるには美濃國の不破道を通らなければならなかった。当然、近江朝廷の追手が駆けて来るのもこの街道である。従って何よりも先ずこの道を塞がなければならない。「不破道を塞げ」は緊急の課題であった。

近江朝廷も天武の脱出を知って作戦を立てる。有能な臣が「ゆっくり話し合っているのは遅れてしまう。今すぐ騎馬で後を追いましょ」と提案する。が、大友王は動かなかった。慎重に援軍を求めた。この作戦は近江朝の臣の信頼を失うことになったかもしれない。もしこの時援軍を求めず、大友王自ら手勢を率い天武一行を不破道に追いかけて乾坤一擲の勝負に出ていれば勝機は十分にあった。この時は天武に兵はなかったのである。日本書紀編者はそのような分析に立って記述している。「何故そうしなかったのか？」と問いかけている。その分析は今、日本書紀の壬申の乱戦記を読むと正しいと云えるでしょう。

天武一行は「大野」まで来て日没を迎える。「吉野」から「大野」まで距離はそんなにない。しかし、天武は犬養連大伴の鞍を付けた馬に乗るまでは「輿」で行き、天武が馬を得て皇后が「輿」に乗ったと書く。ということは皇后はそこまでは徒歩だったのであろう。一行は草壁皇子以下、大人二十人余で、他に女・子ども十余人であった。小さな子連れの人達が徒歩というのである。歩行速度は十分遅かった。この大野の地名は現在残っていないが川の名前に大野が残る。大野は大野川の上流、現在の小倉南区・中曽根地区に当たるであろう。

天武不破本陣の位置

壬申の乱で不破は絶対の要所であった。この場所はどこか。「不破」「不破道」と日本書紀は記録しているが、特定できるような言葉はない。天武の行動を追いかけてよう。

- 6・24 吉野宮～菟田の吾城～菟田甘羅村(美濃王を徴す)～菟田郡家～大野～隠郡驛家(夜半)～伊賀郡驛家～伊賀中山
- 6・25 荊萩野(早朝)～積殖の山口～大山～伊勢鈴鹿郡(伊勢國司と遇う)～川曲の坂下(日暮れ)～伊勢三重郡
- 6・26 朝明郡迹太川(朝)～朝明郡家(男依伝令)～伊勢桑名郡家泊
- 6・27 桑名郡家～不破郡家(本陣)～野上に行宮

天武は「美濃國に行き安八磨郡で先づ兵を發せ」と命令し、「朕今發路たむ」と6月24日に行動をおこした。「菟田の甘羅村」を過ぎた所で「美濃王」を召した。「菟田」とは小倉南区である。「美濃」は荊田町である。この二つは近距離で時間的にも地理的にも妥当な出来事である。天武の命令のポイントは「急(すみやか)に不破道を塞げ」にある。不破道確保こそが緊急の命令であった。不破道が天武脱出路だったからである。

天武は「菟田郡～隠郡驛家～伊賀郡驛家～伊勢鈴鹿郡～伊勢三重郡～伊勢朝明郡～伊勢桑名郡」と進んだ。しかしこの道程に「美濃國不破道」はない。日本書紀編者はここを曖昧にしている。八世紀近畿天皇家の地図ではこの道程に不破道は存在しないが、実際の天武は菟田郡家から伊勢鈴鹿郡に抜ける時に「美濃國の不破道」を通ったのである。

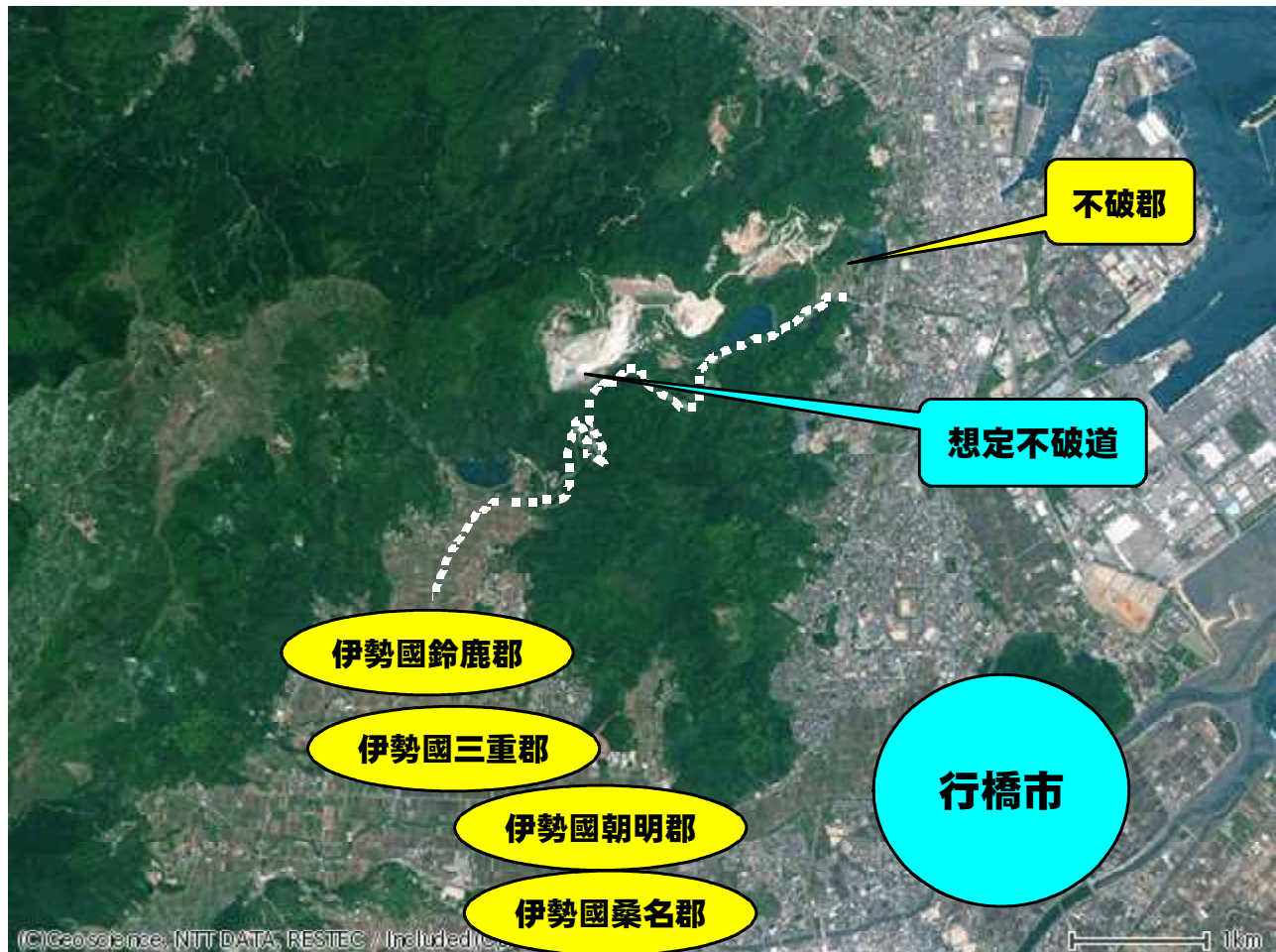
天武が夜通しかけて抜けた不破道を塞ぐことに成功した報せが6月26日の朝になって天武の下に届く。村國連男依が「美濃の師三千人を發して、不破道を塞ふるもとを得つ」と報告した。ここで初めて天武は安心する。もはや追っ手を心配しなくてよい。これ以上先に逃げる必要はない。そして26日の夜は吉野脱出以来初めて伊勢桑名郡家の屋根の下で休んだ。



伊勢まで行きその先をどうするか、この点に関する天武の命令は明らかではない。もし不破道を防ぐことができなければ天武はさらに伊勢(行橋市)を南下して逃げなければならなかったであろう。しかし伊勢の朝明郡家で不破道を防いだとの報せを得て天武は逃走を止めた。伊勢桑名が逃走の終点であった。

翌27日に不破の高市皇子から「御所は遠り居りては、政を行むに便もあらず。近き處に御すべし」と進言を受け天武は不破に入ったが、この行程は伊勢桑名郡から不破郡に戻ったということである。一旦伊勢桑名まで

脱出したがもはや美濃國で挙兵して不破道を押さえ安全は確保した。天武軍の本隊三千が不破に駐屯している。故に伊勢桑名では後方過ぎる。天武本陣を不破郡家に構えるべきですと高市皇子は進言し、天武は伊勢桑名から引き返して前線の不破郡まで戻ったのである。



(d)「伊勢に逢へ」……目的地は伊勢

天武は蜂起の際、大分恵尺・黄書造大伴・逢臣志摩を留守司高坂王のもとに派遣して驛鈴を手に入れるように命令する。驛馬を使用したい為である。

若し、鈴を得ずは、廻ち志摩は還りて覆奏せ。恵尺は馳せて、近江に往きて、高市皇子・大津皇子を喚して、伊勢に逢へ。

この命令には蜂起の拠点が伊勢であることを示している。天武の基本方針は伊勢に全軍を結集して乱を起こすことにあった。全軍、伊勢を目指せ。これが蜂起の根幹であった。

大分恵尺・黄書造大伴・逢臣志摩、三人は驛鈴を手に入れるために「倭京」へ行くが、驛鈴を手に入れることができず、志摩は天武の下に還って「得ず」と報告する。恵尺は近江に行って高市皇子、大津皇子を呼び出して伊勢で合流するべく行動する。

天武紀編者は天武の「近江に往きて、高市皇子・大津皇子を喚して、伊勢に逢へ」という言葉を一語一句正確に記録し、いささかの変更もしなかった。天武は恵尺に近江に往けと命令している。というのも其処に高市皇子・大津皇子が居たからである。ではこの近江とはどこか。

九州天皇家で近江とは「淡海」の意である。「淡海」とは文字通り淡い海のことです。水深浅い海を意味する。この浅い海とは曾根の海である。曾根は日本でも有数の干潟で干潟に潮が満ちてくれば淡海となる。九州天皇家で近江と云えばそれは曾根の海であった。

天武の命令は「[近江に往って高市皇子・大津皇子を喚して](#)」である。この命令はもちろん「淡海の海に行け」という意味ではなく「近江の宮へ行け」という命令だった。近江には九州天皇家伝統の大宮があった。

近江(淡海)に最初に宮を造ったのは景行である。景行は近江の志賀に高穴穗宮を建てた。その子成務も近江高穴穗の宮で北九州を統治した。以来そこには九州天皇家の宮が存在してきた。景行天皇は近江志賀(小倉南区長野)で亡くなった。景行紀が記録している宮は「豊前國長峽縣(行橋市)の行宮」「来田見邑(小倉南区朽網)の宮室」「日向國(小倉北区)の行宮・高屋宮」「伊勢國(行橋市)の綺宮」「倭(田川市)の纏向宮」である。九州天皇家景行天皇の宮は全て九州の田川市、行橋市、小倉南区、小倉北区である。

天武の時代、小倉南区(近江)の宮は大津宮と呼ばれていた。竹馬川を遡り竹馬橋が架かる小倉南区長野に当時大型船が停泊できる湊があった。その湊を大津と云った。大津宮はその湊の近くにあったと思われる。高市皇子・大津皇子はその近江大津宮に居た。天武の命令は小倉南区長野にあった近江大津宮に居る二人の皇子を連れて伊勢に向かえという命令であった。

九州天皇家の伊勢

では伊勢とはどこか。八世紀の令制國制定後の三重県伊勢ではない。九州天皇家では伊勢は行橋市である。伊勢國風土記が存在する。この伊勢風土記は現在の伊勢市の風土記ではなく古代伊勢(行橋市)の風土記である。

[伊勢の國の風土記に云わく、夫れ伊勢の國は、天御中主尊の十二世の孫、天日別命の平治けし所なり。天日別命は、神倭磐余彦の天皇、彼の西の宮より此の東の州を征ちたまひし時、天皇に随ひて紀伊の國の熊襲の村に到りき。時に、金の鳥の導きの隨に中州に入りて、菟田の下縣に到りき。天皇、大部の日臣命に勅りたまひしく、「逆ふる輩、イコマの長牒を早く征ち罰めよ」とのりたまひ、亦、天日別命に勅りたまひしく、「天津の方に國あり。其の國を平けよ」とのりたまひて、即ち標の劍を賜ひき。天日別、勅を奉りて東に入ること幾百里なりき。其の邑に神あり。名を伊勢津彦と曰へり。](#)

伊勢風土記は神武東征を現地に立って詳述している。

- (1) 東の州とは小倉南区の竹馬川の中洲である。
- (2) 紀伊の國の熊襲の村とは北九州市門司区吉志である。
- (3) 菟田の下縣とは小倉南区吉田に存在した熊襲倭國の行政区である。
- (4) 天津の方の國とは伊勢津彦が支配していた古代伊勢である。それは行橋市である。

説話では神武方の武将・天日別命が伊勢津彦に「國譲り」を迫る。断る伊勢津彦を武力で攻め殺そうとした時、「吾が國は悉に天孫に献らむ」と詫び、「その証拠は何か?」と迫る天日別命に「八風を起こして海水を吹き、波浪に乗りて東に入らむ」と答える。これが「伊勢の神風」の説話である。

伊勢風土記が伝えるように、神武東征とは「東の州(くに)」への征服戦であった。緒戦に敗れた神武一行は門司区吉志から一旦退却して南の海から「熊襲の村」に入った。天日別命は別の命令を受けて「菟田」から東に行き伊勢津彦の國に至った。「菟田」は小倉南区長野である。長野には長野城址があるがこの城趾は神武が國見をしたことから「国見の丘」と呼ばれた。熊襲倭國の二人の王が立て籠もり、神武東征の最大の激戦地だった。そこから東に進めば菟田町である。少し南下すると行橋市でそこが九州天皇家の伊勢國である。

九州天皇家の「伊勢國」は行橋市に存在した。天武が蜂起の拠点とした伊勢とは行橋市だった。天武は彦島の「橘の嶋宮」を脱出して小倉南区から行橋市へ逃れ、そこで蜂起しようとした。

- 6・25 [荊菰野\(あけぼの\)～積殖の山口～大山～伊勢鈴鹿郡\(伊勢國司と遇う\)～川曲の坂下\(日暮れ\)～伊勢三重郡\(夜\)](#)
- 6・26 [朝明郡迹太川\(朝\)～朝明郡家\(男依の朗報\)～伊勢桑名郡家泊](#)
- 6・27 [桑名郡家～不破郡家\(本陣\)～野上に行宮](#)

九州天皇家の地図で見れば行橋市は倭京(田川市)と近江(小倉南区)をつなぐ街道の要所である。地理上攻めるに良し、退くに良しの要所である。天武が伊勢(行橋市)を蜂起の拠点としたのは全く妥当な判断であった。

天武は脱出の際、伊勢國の鈴鹿郡～三重郡～朝明郡～桑名郡と伊勢國の四つの郡を南に進んだ。そして桑名郡が終点となった。美濃國の挙兵によってこれ以上先に進む必要がなくなったからである。美濃國不破郡で挙兵に成功して天武の拠点は不破郡となった。故に天武は伊勢國桑名から美濃國不破郡に戻り本陣を構え近江朝廷軍と戦うことになったのである。



天武の行動を関西地図で検証してみよう。吉野から伊勢へは「吉野」～「宇陀」～「名張」～「松阪」～「伊勢」のコースが想定できる。

このコースから美濃は全く外れる。美濃は伊勢進路と全く関わりがない遙か彼方に位置する。関西地図では「不破防衛」「美濃挙兵」が軍事的に意味をもつであろうか。

蜂起は天武の存在抜きに成り立つものではない。天武の命こそがまず守られなければならない。一兵も同行していない天武が伊勢へ脱出する際「美濃挙兵」を命じたとするならばなんと的外れの命令でしょう。今一番護らなければならないのは天武の身の上である。美濃は遙か彼方である。

関西地図で天武の進路を想定すればまず挙兵して押さえるべき要所は名張または伊賀となる。美濃は急場ではない。兵を起こして道中の安全を確保すべきと考えられる最重要場所は伊賀である。伊賀で挙兵して伊賀から名張への道を封鎖すれば天武一行は無事伊勢へ抜けることができる。近江朝廷(琵琶湖)が伊勢へ向かう天武を追うとすれば美濃ではない。当然伊賀である。

天武の言葉を日本書紀編纂者は変更したり修正したりすることはできなかった。天武の言葉はそのまま伝えられてきた。天武の言葉に従うと目的地は伊勢である。蜂起の拠点は伊勢である。従って天武も皇子も全て伊勢へと急いだ。九州天皇家地図では「吉野」～「菟田郡」～「隠(なばり)郡」～「伊賀郡」～「伊勢鈴鹿郡」～「伊勢三重郡」～「伊勢朝明郡」は一つの道、全て伊勢へ通じる街道に存在する郡である。この行程に全く問題は

ない。伊勢へ伊勢へと全員が夜を徹して進んだのである。

ところが八世紀令制國制定後の日本地図に従うと伊勢と美濃は方向が異なる。日本書紀は天武は美濃に向かい、伊勢に到着したと書いている。美濃の先に伊勢が存在したのである。だが八世紀令制國地図では美濃の先に伊勢國は存在しない。美濃は吉野の北東に伊勢は吉野の西に存在する。これでは「伊勢に逢え」という天武の命令は意味をなさない。八世紀令制國地図(現在の日本地図)に従えば天武は「美濃に逢へ」と命令しなければならなかったであろう。

天武はなぜ伊勢で蜂起しようとしたのか。蜂起に必要な兵が徴集できたからである。古代伊勢、行橋市の地形は平野が開け海河の幸に恵まれた豊かな土地である。天武の時代もこの土地には多くの人が住んでいた。

行橋市の人口は70,070人(2010年)、美濃市は23,084人(2011・4)である。天武がもし奈良吉野に居てそこを脱出して蜂起する國を選ぶとすれば岐阜県美濃市ではない。三重県伊勢市(人口130,228人)であろう。

日本書紀は天武が「菟田」で「美濃王を徴す」と記している。現代地図では菟田～美濃間は約270kmある。

(吉野町上市～美濃市上条 299km 徒歩所要時間 39時間44分)

菟田を奈良宇陀と想定し、美濃を岐阜県美濃と想定すると「美濃王」は270kmを駆けてやってきたことになる。奈良の宇陀で岐阜県美濃王との会見はありうる話ではない。



(e) 大分君恵尺が東國出身の武将

天武4年6月23日に、大分君恵尺、病して死なむとす。天皇、大きに驚きて、詔して曰はく、「汝恵尺、私を背きて公に向きて、身命を惜しまず。遂雄しき心を以て、大きに役に勞れり。恒に慈愛まむと欲へり。

故、爾既に死すと雖も、子孫を厚く賞せむ」とのたまふ。仮りて外小紫位に騰げたまふ。」

大分君恵尺は壬申の乱の功労者である。さてこの人物は名前は「大分」であるから彼は「大分」の出身である。「大分」とはどの地方か。豊後風土記にこの地名が登場する。

古代大分は小倉南区

豊後國風土記 大分の郡

郷は九所、駅是一所、烽は一所、寺は二所なり。昔者、捲向の日代の宮に御宇しめしし天皇、豊前の国の京都の行宮より、この郡に幸して、地形を遊覧て、嘆きてのりたまひしく、「廣大きなるかも、此の郡は。碩田と名づくべし」とのりたまひき。今、大分と謂う、これ其の縁なり。

大分川、郡の南にあり。此の河の源は、直入の郡の朽網(くたみ)の嶺より出で、東を指して下り流れ、此の郡を經過ぎて、遂は東の海に入る。因りて大分川といふ。年魚、多にあり。

古代大分は現在の大分県ではない。ヒントは「朽網(くたみ)」である。これは小倉南区朽網(くさみ)である。「朽網の峯から流れ出る河、大分川」とは現在の朽網川である。豊後風土記に登場する「大分」は小倉南区・朽網である。景行紀では「来田見邑」と書かれている。この近くに「速見の郡」が存在したと書かれている。従って「速見の郡」も小倉南区である。景行天皇が巡狩したのは現在の大分県ではなく、小倉南区の古代國「大分」であった。

日本書紀・景行天皇

冬十月に碩田國に到りたまふ。其の地形廣大きにして亦麗し。因りて碩田と名く。速見邑に到りたまふ。女人有り。速津媛と曰ふ。一所の長たり。其れ天皇の車駕すと聞りて、自ら迎え奉りて諮して言さく、「此の山に大きなる岩窟有り。鼠の石窟という。二の土蜘蛛有り。其の石窟に住む。一をば青と曰ふ。二つを白と曰ふ。又直入縣の禰疑野に、三つの土蜘蛛有り。一をば打猿と曰ふ。二をば八田と曰ふ。三をば國摩呂と曰ふ。是の五人は並びに其の為人強力くして、亦衆類多し。皆曰わく「皇命に従はじ」といふ。若し、強に喚さば、兵を興して距かむ」とまうす。天皇惡したまひて、進行すこと得ず。即ち来田見邑に留りて、かりに宮室を興して居します。よりて群臣と議りて曰わく「今多に兵衆を動かして、土蜘蛛を討たむ。若し其れ我が兵の勢いに畏れて、山野に隠れてば、必に後の愁いを為さむ」とのたまふ。則ち海石榴樹を採って、椎に作り兵にしたまふ。因りて猛き卒を簡びて、兵の椎を授けて、山を穿ち草を排ひて、石室の土蜘蛛を襲いて、稻葉の川上に破りて、ふつくに其の輩を殺す。血流れてつぶなきに至る。亦血の流れし所を血田という。復、打猿を討たむとして、ただに禰疑山を渡る。時に賊虜の矢、横に山より射る官軍の前に流ること雨の如し。天皇、更に城原に返りまして、水上に卜す。便ち兵を整えて、先ず八田を禰疑野に撃ちて破りつ。ここに打猿え勝つまじと謂いて「服はむ」と請す。然れども許したまはず。皆自ら谷に投りて死ぬ。」

「禰疑山」とは貫山である。ここが九州天皇家の「河内」である。大分君恵尺はこの地の豪族だった。天武に付き添った豪族は「東国」出身と言われる。「東国」とは現在の岐阜、美濃ではない。当時「東国」と呼ばれた地方は太宰府から見て東の國を云った。つまり行橋市を東国と云ったのである。古代東国とは周防灘に面する国々であった。古代「大分(小倉南区)」も「東国」と考えられた。大分君恵尺は古代東国地方の「大分(小倉南区)」出身の豪族であった。もし壬申の乱の当時に「東國」が岐阜県美濃市を指していたとすれば九州「大分」出身の大分君恵尺が東國の武將と呼ばれた訳が説明できない。

菟田は小倉南区

「菟田」は九州天皇家では最も古い地名である。この地名はすでに古事記中巻・神武天皇に登場する。

故爾に宇陀(うだ)に兄宇迦斯、弟宇迦斯の二人有りき。

神武東征の時、神武一行は「熊野」から吉野河口に出て、その後「菟田」の長官「宇迦斯」兄弟に出会った。

吉野河は竹馬川で、そこから「菟田」に進むという行程であった。「菟田」とは小倉南区・長野である。

日本書紀の完成は720年である。この時点での世界はもはや近畿天皇家の世界である。天武紀は九州天皇家天武の記録である。近畿天皇家と九州天皇家には同じ地名が存在する。だが同じ地名であってもその指し示す場所は異なる。壬申の乱の「菟田」は神武東征に登場する「菟田」である。神武東征の「菟田縣」は小倉南区長野である。奈良の「宇陀」ではない。

壬申の乱戦記は天武が九州天皇家の王であった時代の出来事である。従って壬申の乱は九州天皇家の世界地図で読まなければならない。

(f) 朝明郡で天照大神を望拝す・・伊勢神宮は行橋市

「朝明郡」で天照大神を望拝した。伊勢神宮に天照大神が祀られた説話は垂仁紀にある。

垂仁25年3月10日、天照大神を豊スキ入姫命より離ちまつりて、倭姫命に託けたまふ。ここに倭姫命、大神を鎮め座させむ所を求めて、菟田の笹幡に詣る。更に還りて近江國に入りて、東美濃を廻りて、伊勢の國に到る。時に、天照大神、倭姫命に教へて曰はく、「是の神風の伊勢國は、常世の浪の重浪帰する國なり。傍國の可憐し國なり。是の國に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教え随に、其の祠を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂う。則ち天照大神の始めて天より降ります所なり

天照大神は元々どこにいたのか。彦島の古代國・天(彦島老町)である。垂仁紀が「則ち天照大神の始めて天より降ります所なり」と書くように天照大神は彦島に存在した古代阿波國で誕生し、一生を「高天原」と呼ばれた高地性弥生集落(彦島老の山)で過ごした。その死後、彦島に祀られていたが初めて他所に移ったというのが垂仁紀の説話である。その行路は次のようになる。

天(彦島)～菟田～近江～東美濃～伊勢

「天」は彦島で、次の「菟田」は小倉南区長野である。次の「近江」は小倉南区曾根で、東美濃とは苅田町である。そして伊勢は行橋市である。行橋市には天照大神を祀った伊勢神宮が存在したという訳である。これは三重県の伊勢神宮の話ではなく九州天皇家の伊勢神宮の話である。伊勢神宮は古代伊勢、行橋市に存在した。では何故天照大神は行橋市を選んだのであろう。恐らくここが当時最も栄えていた町だったからと思われる。天照大神は多くの人々の中で賑やかに暮らしたかった。天武一行が「朝明郡」で天照大神を望拝したのは行橋市の九州天皇家の伊勢神宮であった。

ところで垂仁紀では「伊勢國は、常世の浪の重浪帰する國」と云い表している。この記述にも歴史が込められている。「常世」とは天照大神が天石磐に隠れた時、「思兼神、深く謀り 遠く慮りて、遂に常世の長鳴鳥を集めて互いに長鳴させしむ」とここに登場する。補注では「常住不変の國の意」と書き、言わば觀念上の國と捉えているが「常世」と云われた國は現実の國であろう。「常世」の國にふさわしいのは地理的に考えて愛媛県である。その國にぶつかった波が繰り返し繰り返し押し寄せる國とは周防灘に面する國である。「常世」は愛媛県、伊勢國は行橋市である。

壬申の乱において天武は伊勢國をめざした。高市皇子・大津皇子に「伊勢に逢え」と命令したのはその為である。伊勢鈴鹿まで行くと天武側の勢力は強力となり、天武は本陣を不破まで戻した。伊勢への脱出の途上天武の領地であった「美濃國・湯沐」の米を伊勢國に運ぶ馬五十頭を借りて歩行者を乗せたという。美濃國は天武の領土で、「湯沐」の産米を伊勢神宮に納めていたというわけである。しかし古代美濃國だけが天武の領土だったのではなく小倉南区全域が九州天皇家の領土だったのであろう。

天武は蜂起を決意した。その為に徴兵しなければならない。だが今兵はいない。兵を集めるのは自国の中で最も豊かで最も人口が多い國だ。それは伊勢だ。伊勢で挙兵しよう。

故に天武は伊勢(行橋市)をめざした。当然の作戦だった。かつて神武は天照大神の“靈力”に加護されたが天武は伊勢神宮に現実的な加護を求めたのである。

(g) 伊勢桑名郡は後退の最終地

現代地図を基にして壬申の乱天武行程を考察してみよう。天武紀編者は天武が伊勢國鈴鹿郡から伊勢國の三重郡、伊勢國の朝明郡を通して6月26日に伊勢國桑名郡まで逃れて来たと書いている。この行程は現代地図で見ても特に問題はない。問題は桑名まで来て天武が「**即ち停りて進さず**」と書いていることである。

これは事実だった。故に日本書紀編者はそのまま書き込んだ。だがこの記述が天武の行程を考える上で重要な意味を持つ。

- 6・24 吉野宮～菟田の吾城～菟田甘羅村(美濃王を徴す)～菟田郡家～大野～隠郡驛家(夜半)～伊賀郡驛家～伊賀中山
- 6・25 荊菰野(早朝)～積殖の山口～大山～伊勢鈴鹿郡(伊勢國司と遇う)～川曲の坂下(日暮れ)～伊勢三重郡
- 6・26 朝明郡迹太川(朝)～朝明郡家(男依朗報をもたらす)～伊勢桑名郡家泊・・・**即ち停りて進さず**
- 6・27 桑名郡家～不破郡家(本陣)～野上に行宮



「**即ち停りて進さず**」とは天武はここで留まり先には進まなかったと云っているのである。天武は「鈴鹿～三重～朝明～桑名」と逃げてきたが「桑名」で落ち着きそれから先へは逃げなかった。つまり「伊勢桑名」がこの逃避行の最終地点、ここが終点であった。

何故か。その理由は明白である。もはや逃げる必要がなくなったからである。その報せを天武にもたらしたのが男依であった。26日、男依は驛馬に乗って朝明郡まで駆けつけ「**美濃の師三千人を發して、不破道を塞ふることを得つ**」と天武に報告する。

この報せの意味もまた明らかにしなければならない。天武は美濃國の不破道を通して伊勢國へ逃れてきた。近江朝廷の追っ手が駆けてくる道もまたこの不破道である。故に天武は先ず不破道を塞げと命令した。男依はもはや近江朝廷の追っ手は来ないと報告したのである。26日の夜、天武はやっと桑名郡家の屋根の下で安心

して眠ることができた。そして27日には高市皇子の進言を入れて不破郡までユーターンしている。天武はもと来た道を引返して不破まで戻りそこで本陣を構えた。天武逃避行は桑名で終止符を打たれた。

現代地図では桑名が最終地点とはならない。さらに桑名からさらに前進しなければ不破に到着することができない。天武紀では高市皇子が「御所に遠り居りては、政を行むに便あらず。近き處に御すべし」とが進言して天武は不破に入ったと書いている。この記述は天武は桑名から不破へと前進したと読まれているがこの読みは現代地図に依拠した読みである。

史実は日本書紀が記述しているように「桑名で即ち停りて進さず」だった。桑名が逃避行の最終地点だった。故に天武紀編者は「即ち停りて進さず」と書いたのである。天武紀編者はこの真実を曲げず桑名が最終地であったと明記した。天武は伊勢桑名まで逃げた。しかし美濃で挙兵し不破道を塞ぐことが出来た。天武軍は不破道を支配下に収め伊勢への追っ手はもはや来ない。天武はそれを聞いて桑名から不破まで引き返したのである。天武は不破道を通して伊勢桑名まで逃げ、また不破道を通して不破に引返して反撃したのである。

(h) 太筑紫宰……筑紫(博多)に唐軍が居た

近江朝の使者佐伯連男の援軍要請に対して筑紫太宰・栗隈王は答える。

筑紫國は、元より邊賊(ほか)の難(わざはひ)を戊(まも)る。其れ城を峻くして隍(みぞ)を深くして、海に臨みて守らすは、豈(あに)内賊の為なむや。今命(いまおほせこと)を畏(かしこ)みて軍(いくさ)を發(おこ)さば、國空しけむ。若し不意之外に、倉卒(にはか)なる事有らば頓(ひたぶる)に社稷(くに)傾きなむ。然(しこう)して後に百たび臣を殺すと雖も、何の益(しるし)あらむ。豈(あに)敢えて徳を背かむや。軽く兵を動かざることは、其れ是の縁なり」とまうす。

筑紫太宰・栗隈王は「邊賊(ほか)の難(わざはひ)を戊(まも)る」と答えている。この言葉は具体性をもつ。筑紫には駐屯していた「邊賊」がいたのである。

元年の春三月の壬辰朔己酉(18日)に、遣内小七位阿曇連稻敷を筑紫に遣して、天皇の喪を郭務倥等に告げしむ。是に、郭務倥等、咸に喪服を著て三遍挙哀る。東に向ひて稽首む。壬子(21日)に、郭務倥等、再拝みて、書函と信物とを進る。

夏五月の辛卯の朔壬寅(12日)に、甲冑弓矢を以て、郭務倥等に賜ふ。是の日に、郭務倥等に賜ふ物は、総合て純一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。戊午(28日)に、高麗、前部富加朴等を遣して調進る。庚申(30日)に、郭務倥等罷り帰りぬ。

筑紫には白村の敗戦以来唐の使者が駐屯していた。筑紫とは博多である。ここに郭務倥が居た。筑紫太宰・栗隈王の言葉はこの現実を反映している。唐軍が駐屯している。今太宰府の兵を動かすことはできない。故に佐伯連男は引き下がざるをえなかった。壬申の乱は唐占領軍の筑紫駐屯という現実の下での事件だった。この唐軍の存在が乱の帰趨を左右することになる。

(i) 倭(やまと)は田川市

九州天皇家の首都が「倭(やまと)」である。神武が征服した國は倭國(香春町・田川市)と呼ばれていた古代国家である。だがここだけが倭國ではない。九州各地に倭國が存在した。これらの倭國は姫氏創建の国家であった。中国の史書に登場する倭人とはこの姫氏である。姫氏は古代中国「呉」の王朝一族で祖国滅亡後九州に渡来してきた。彼らは九州各地に國を創建し、その國は初代の王「忌(姫)」の名前を採って「倭(忌)國」と呼ばれていた。香春町の「倭國」は神武の時代(紀元前一世紀)には「楚」の王家一族である熊襲(熊氏)の王が支配していた。神武は熊襲支配の「倭國」に侵入して神武国家の樹立を宣言した。

神武が征服した國は「倭國」と呼ばれていたが、神武は「倭國」を「やまと」と呼んだ。漢字では「倭國」と書かれるがこの訓みは「キコク」「イコク」「ワコク」となっても「やまと」とはならない。「やまと」は九州天皇家の自称である。万葉集では万葉仮名で「山常」「八間跡」「山跡」と書かれている。九州天皇家において田川市・香春町は「やまと」と呼ばれていたのである。

「やまと」とはいかなる意味をもつのであろうか。神武の祖先たちが住んでいた大八島は嶋であった。彦島、門司、大積、若松区等は超古代、島であった。これらの嶋の港に弥生集落が存在した。「みなと」は「水門」とも表記されるが「みなと」とは「水戸」であろう。「みなと」をそのように理解すれば「やまと」は「山戸」であろう。「やまと」と「みなと」は対となる言葉である。「みなと」は川・海の湊に存在した集落をさし、「やまと」は内陸部に存在した集落をさした。九州天皇家の歴代は田川・香春の集落を海辺ではなく山間に存在する戸(家)という意味で「山の戸(やまと)」と呼称したのであろう。

壬申の乱戦記は天武と大伴軍の二つの戦記で構成されているといわれる。戦記は大伴吹負が倭京(田川)を占拠していた近江朝廷勢力を一掃して首都を確保し有力豪族を天武側につけたことが勝利の大きな要因だと分析している。この結果、近江朝廷は天武が陣を構える不破まで侵攻すれば背後から挟撃される恐れが生じた。美濃の天武陣まで侵攻できない。が行かなければ勝利はない。

天武は近江軍は不破陣(小倉南区)まで攻めて来くことはできない、と判断した結果、倭京(田川)に居る大伴軍へ援軍を送ることが可能となった。その援軍を得て大伴軍は近江軍主力「沓岐史韓国」を破ることが出来た。各野戦に敗退した近江軍は「瀬田」に全軍を結集して最終決戦を挑む。しかし「沓岐韓国」や「大野果安」等有能な指揮官を失っては全軍を一致結束して動かすことができなかった。「瀬田橋」の中央の一枚の板の攻防に負けた近江軍はあっけなく崩壊してしまう。

(j) 河内は小倉南区、近江も小倉南区



關西地図で考えてみよう。

“天武方は6月27日岐阜県不破に陣を構えた” このような情報が手に入った。ここで、対天武作戦を立てるとしよう。貴方は近江朝の軍事顧問である。近江朝には有能な將軍大野果安と壹伎史韓国がいる。

貴方は二人の將軍のうち一人を大阪に向かわす作戦を立てますか？それとも二人の將軍を天武・岐阜県不

破本陣に向かわせますか？

作戦には必勝というものはないであろう。だがここで大阪に軍を裂く作戦はあるか。近江朝全軍はともかく天武本陣に向けて進軍すべきであろう。琵琶湖を利用して天武本陣の背後に回るか、国道8号線を北上するか、戦術は多様であるが、基本は天武本陣を目指しての北上である。

ところが近江朝の有能な将軍・壹伎史韓国の7月2日「河内」で天武方の武将坂本臣財と戦っている。この「河内」を従来の解釈のように「大阪の河内」と想定するとそこは天武本陣と遙かに離れる。双方とも全く場違いの意味のない戦いをしたことになる。大阪河内での戦いはあり得ない。これは壬申の乱を関西地図で読むという根本的な間違いをしているからである。壬申の乱戦記は九州天皇家の世界地図で読まなければならない。

壬申の乱戦場河内・近江は小倉南区

天武は吉野から河内を経て伊勢に向かい伊勢桑名郡まで進んだ。しかし美濃挙兵が成功したため高市皇子の要請を受けて不破郡まで戻りそこに本陣を置いた。近江朝は当然不破の天武陣に対して河内(小倉南区)で戦う作戦を立てた。故に近江軍は「河内・高安城」に陣を構えたのである。

大阪八尾に同じ名前の「高安城」が存在する。従って天武紀「高安城」は大阪八尾の高安城だと誤読されてきた。確かに八尾高安城は大阪平野を眼下に見下ろす絶好の位置にあるがここが戦場になったことはない。

実際の戦場は小倉南区の山城だった。だが、その山城は天武軍・坂本臣財によって奪われてしまう。その後、近江軍・壹伎史韓国が河内より進軍して来たので坂本臣財は「高安城」を出て「衛我河(えがのかわ)」の西岸で対戦する。この戦いは近江方・韓国が勝った。

この「衛我河(えがのかわ)」とは九州天皇家の「河内」の川である。古事記には仲哀天皇陵の所在を「河内の恵賀(えが)の長江に在り」と書く。また允恭陵は「河内の恵賀(えが)の長枝に在り」と書く。どちらも九州天皇家の「河内の恵賀」である。河内とは小倉南区・大野川・貫川・朽網川の流域をいう。壬申の乱における決戦の舞台であった「衛我河」と「仲哀稜・允恭稜」の「恵賀」は同じ場所である。

壬申の乱の戦場の一つは7月2日の河内だった。6月27日に不破まで戻った天武は其処に本陣を置き、近江朝廷軍も天武不破本陣を襲うため犬上川まで軍を進める。戦闘場所は近江であるが滋賀県近江ではない。小倉南区の古代近江である。

では九州天皇家の古代地図では7月2日の河内(小倉南区)決戦はありうるか。

7月2日の天武の軍事行動

- (1) 紀臣阿閉麻呂・多臣品治・三輪君子首・置始連菟、数萬が伊勢の大山を越えて倭京に向かう。
- (2) 村國男依・書首根麻呂・和珥部臣君手・膳香瓦臣阿倍の兵数萬が不破から出て近江に出撃。
- (3) 多臣品治、荊萩野に駐屯。田中臣足麻呂が倉歴道を防衛。

7月2日の近江朝廷の軍事行動

- (1) 山部王・蘇賀臣果安・巨勢臣比等数萬が不破襲撃のため犬上川に集結。
- (2) 山部王、蘇賀果安・巨勢臣比等によって殺される。果安は自殺する。近江の将軍羽田公矢國は投降。
- (3) 近江方の将老岐史韓国が西より進軍。天武方の坂本財高安城から降りて「衛我河(えがのかわ)」を渡り川の西で戦闘。韓国が勝利。

九州天皇家の地図では河内での両軍の戦闘は必然である。両軍がぶつかるのであればここだという場所で戦われている。九州天皇家で「近江」或いは「河内」と呼ばれた土地は小倉南区である。

なお7月2日に天武は紀臣阿閉麻呂・多臣品治・置始連菟、数萬を伊勢の大山を越えて倭京に向かわせている。この行軍は伊勢から伊勢の大山を越えて倭京に向かったのであるが紀臣阿閉麻呂・多臣品治・置始連菟の軍は古代伊勢(行橋市)から倭京(田川市)に向った。7月2日の行動は小倉南区・近江での決戦に備え、天武本陣の背後、都が存在した田川市を防衛するための軍事行動であった。いずれも天武が本陣を構えた荊田町(古代不破)を起点とした作戦である。



(k) 東海道将軍……東海道は日向街道

訓みは「うみつみちのいくさのきみ」である。「東の海の道」の意でこの道が本来の東海道である。東海道・山陽道・北陸道・西海道などの街道名は九州の京、太宰府を起点とした街道名である。東海道は文字通り太宰府の東の海、周防灘に沿って走る街道をいう。

(l) 瀬田の合戦……瀬田は古代瀬田

古代北九州に「瀬田」が存在した。近江朝廷西軍と天武東軍が対峙したのが瀬田橋であった。瀬田は九州天皇家では三度戦場となった。一度は仲哀の子、忍熊王の神功皇后への反乱である。「逢坂」の戦いに敗れた忍熊王と将軍五十狹茅宿禰は共に「瀬田の渡」に入水して果てる。神功方の将軍武内宿禰はその遺体を得ることができず歌う。

淡海の海 瀬田の渡に 潜く鳥 目に見えねば 憤しも

その後菟道で遺体を発見する。

淡海の海 瀬田の渡に 潜く鳥 田上過ぎて 菟道に捕へつ

仲哀も神功皇后も彦島の「彦島・八幡宮」に足跡が残っている。忍熊王の遺体は網代木にひっかかったと云う。「瀬田」の渡りで沈んだ死体が「菟道」で上がった。九州天皇家に「瀬田」と「菟道」が存在した。

二度目は仁徳紀である。戦場というほどのものではないが、皇子が死んでいる。「我、太子を殺して、遂に帝位登らむ」と大山守皇子は太子菟道稚郎子の殺害を謀る。しかし大鷲尊(仁徳)の通報によって太子は待ち伏せされる。大山守皇子はそれを知らずにやってきて舟に乗り川の途中で舟から落とされて水死する。

ちはや人 菟道の渡りに 棹取りに 速けむ人なし 我が對手に来む
然るに伏兵多に起りて、岸に着くことを得ず。遂に沈みて死せぬ。

(m) 難波に至る……難波は関門海峡

(n) 嶋宮



乱に勝利した後の天武は次のような日程で行動している。

九月己丑朔丙申(8日)車駕還宿伊勢桑名
丁酉(9日)宿鈴鹿
戊戌(10日)宿阿閉
己亥(11日)宿名張
庚子(12日)詣于倭京而御嶋宮
癸卯(15日)自嶋宮移岡本宮

9月8日は「車駕還宿伊勢桑名」である。これは不破郡の宮から伊勢桑名郡に戻り郡家に泊まったということである。翌日は伊勢桑名郡から鈴鹿郡に戻り泊。翌日は鈴鹿郡から阿閉に戻り泊。翌日11日は阿閉から名張に戻り泊。ここまですを古代天皇家の地図に書き込んでみましょう。

天武は不破宮から伊勢桑名郡家まで一度戻りそして鈴鹿郡、名張郡へと進み、12日に「倭京に詣り嶋宮に御す」とある。「倭京」とは神武の都、田川市である。天武は12日に田川まで行ってその後「嶋宮(彦島)」に帰ったということになる。

11日に名張に泊まって12日に天武が戻ったのは「嶋宮」と書かれている。彦島嶋宮は天武の自宅である。嶋宮は天武の家族の住居であった。天武はそこへ帰っていった。12日の「倭京」と同日の「嶋の宮」は距離的に無理であろう。従って天武は12日に「倭京(田川市)」に行き天皇家の祖先たちに勝利を報告した。そしてその後彦島の「嶋宮」まで帰ったというのが史実であろう。嶋宮に帰り着いたのが12日か既に13日になっていたかは明らかでない。

岡本宮、飛鳥浄御原宮は田川市

9月15日に嶋宮から岡本宮に移っている。この岡本宮は舒明天皇の宮の名前と同じ宮である。万葉集では舒明の宮は「高市岡本宮」と書く。舒明は天香具山からの国見の歌を歌っている。この天香具山は香春一の岳である。舒明の岡本宮は田川市(香春町)に存在した。天武が移った岡本宮は舒明の宮と同じ宮であろう。天武は彦島から田川市(香春町)へ移り岡本宮の南に新しく宮を建てた。これが「飛鳥浄御原宮」である。この宮も田川市(香春町)に存在した。

古事記序の壬申の乱

正五位上勲五等太朝臣安萬侶は古事記の序に天武について次のように書いている。しかしその記述は不思議な内容である。

…安河に議(はかりて)天下(あめのした)を平(ことむ)け、小濱(をばま)に論(あげつら)ひて国土を清めき。是を以て、番仁岐(ほのににぎ)命、初めて高千穂嶺に降り、神倭天皇(かむやまとのすめらみこと)、秋津島に経歴したまひき。化熊(くわゆう)川を出でて、天劍(てんけん)を高倉に獲(え)、生尾(せいび)経を遮(さえぎ)りて、大鳥(たいう)吉野に導きき。舞を列(つら)ねて賊を攘(はら)ひ、歌を聞きて仇(あた)を伏(したが)はしめき。即ち、夢に覺りて神祇を敬ひたまひき。所以(このゆえ)に賢后(けんこう)と称す。烟(けぶり)を望みて黎元(れいげん)を撫でたまひき。今に聖帝と伝ふ。境を定め邦を開きて、近淡海に制(をさ)め、姓を正し氏を撰びて、遠飛鳥に勒(をさ)めたまひき。步驟(ほしう)各異(おのおの)ことに、文質同じからずと雖も、古(いにしへ)を稽(かんが)へて風飢(ふういう)を既に頹(すた)れたる繩(ただ)し、今に照らして典教(てんけう)を絶えむとするに補はずといふこと莫し。

飛鳥の清原の大宮に大八洲御(しら)しめし天皇の御世にいたりて、潜龍元(せんりょうげん)を體(たい)し、滄雷期(せんらいき)に応じき。夢の歌を開きて業を纂(つ)がむことを相(あわ)せ、夜の水(かわ)に投(いた)りて基(もと)を承(う)けむことを知りたまひき。然れども、天の時未だ臻(いた)らずして、南山に蟬蛻(せんぜい)し、人事共給(そな)はりて、東国に虎歩(こほ)したまひき。皇輿(くわうよ)忽ち駕(が)して、山川を凌え渡り、六師(りくし)雷のごとく震ひ、三軍電のごとく逝きき。杖矛(じょうぼう)威(いき)を挙げ、猛士烟(けぶり)のごとく起こり、絳旗(こうき)兵(つわもの)を耀(かがや)かして、兇徒瓦のごとく解け

き。未だ浹辰(せふしん)を移さずして、氣沴(きれい)自ら清まりき。乃ち、牛を放ち馬を息へ、愷悌(がい
てい)して華夏に帰り、旗を巻き戈を戢(おさ)め、儷詠(ぶえい)して都邑(といふ)に停まりたまひき。歳大
梁(ほしたいりょう)に次(やど)り。月夾鐘(げふしょう)に踵(あた)り、清原の大宮にして、昇りて天位(あま
つくらい)に即きたまひき。

古事記は推古で終わる。しかし天武記を書けばこのようになったと思われる記述である。これは安萬侶の評
価であるが個人的な評価ではなく八世紀天皇家の評価であろう。

(1) 番仁岐命、初めて高千穂嶺に降り

葦原中國に降った瓊瓊杵(ニニギ)尊である。彦島「天」から関門海峡を渡り小倉南区・足立山に降った。こ
の山で辺りが暗くなり稲穂を撒いたところ再び明るくなったという故事から「高千穂」という名がついた。周囲が
暗くなり何も見えなくなったという原因は濃霧であろう。足立山は別名霧ヶ岳である。濃霧がよく発生する。瓊
瓊杵尊は彦島「天國(あまくに)」を發ち出雲王朝が支配していた小倉北区を支配下に収めた。天王朝の領
土を拡大した王として評価されている。

(2) 神倭天皇、秋津島に経歴したまひき。化熊川を出でて、天剣を高倉に 獲、生尾経を遮りて、大烏吉野に導きき。舞を列ねて賊を攘ひ、歌を聞き て仇を伏はしめき。

神武は瓊瓊杵(ニニギ)の子孫である。「秋津島」は神武が建国後の晩年諸国を歴訪した時「国見の丘」に登
って眼下に広がる光景を「蜻蛉(秋津)のとなめ」と形容したこと由来する土地の名前である。トンボの交尾
に似た姿で流れるのは竹馬川である。竹馬川が流れる小倉南区が神武が「とんぼ」と云った「秋津島」であ
る。神武が彦島吉備を發ち侵入したのは小倉南区だった。大カラスが飛び去っていったのは竹馬川の河口
である。そこが古代吉野である。現在も葦が茂る。更に菟田(小倉南区長野)に侵入した。菟田には天然の要
害「国見の丘」があった。長野城址である。その城に立て籠もる熊襲倭國の二人の王を倒し、その一族を歌
でもって合図して一斉に切り殺して支配下におさめた。神武は九州天皇家の始祖である。神武から天武まで
この天皇家は北九州に存在した。

(3) 即ち、夢に覺りて神祇を敬ひたまひき。所以(このゆえ)に賢后(けんこう)と稱す。

古事記・崇神記にその説話がある。

此の天皇の御世に、疫病多に起こりて、人民死にて盡(つ)きむと為(し)き。爾に天皇、愁ひ嘆き
たまひて、神牀(かむどこ)に坐し夜、大物主大神、御夢に顯れて曰りたまひしく、「是は我が御
心ぞ。故、意富多泥古を以ちて、我が御前を祭らしめたまへば、神の氣起こらず、國安らかに平ら
ぎなむ」とのりたまひき。是を以ちて驛使を四方に班(あか)ちて、意富多泥古と謂ふ人を求めたま
ひし時、河内の美努村に其の人を見得て貢進(たてまつ)りき。爾に天皇、「汝は誰が子ぞ。」と問
ひ賜へば、答えて曰ししく、「僕は太物主大神、陶津耳命の女、活玉依毘賣を娶して生める子、名
は櫛御方命、飯肩巢見命の子、建甕槌命の子、僕意富多泥古ぞ。」と曰しき。是に天皇大(いた)
く歆びて詔りたまひしく、「天の下平らぎ、人民榮えなむ。」とのりたまひて、即ち伊迦賀色許男命
に仰せて、天の八十毘羅訶(やさびらか)を作り、天神地祇の社を定め奉りたまひき。また宇陀の
墨坂神に赤色の盾矛を祭り、又大坂神に墨色の盾矛を祭り、又坂の御尾の神及河の瀬の神に、
悉に遺し忘ることなく幣帛(みてぐら)を奉りたまひき。此に因りて疫の氣悉に息(や)みて、國家
安らかに平らぎき。

崇神記に出てくる「河内・美努村」は小倉南区に存在した。「僕意富多泥古」が住んでいたのが小倉南区
である。崇神は天神地祇の社を定めた。天神(あまつかみ)とは天照大神を初めとした天王朝の神々である。地
祇とは土地の神々である。「宇陀の墨坂神」とは神武戦記に登場する宇陀で、「墨坂」とは「国見の丘」に通じる
坂道をいう。「墨坂の神」は小倉南区長野の神である。

(4) 烟(けぶり)を望みて黎元(れいげん)を撫でたまひき。今に聖帝と伝ふ。

仁徳天皇の有名な説話である。仁徳天皇の高津の宮は小倉北区にあった。仁徳説話のほとんどは妻石之日賣命との女性を巡る争いである。

其の太后石之日賣命、甚多く嫉妬みたまひき。故、天皇の使はせる妾は、宮の中に得臨かず、言立てば、足母阿賀迦邇(ここは意味不明)嫉妬みたまひき。爾に天皇、吉備の海部直の女、名は黒日賣、其の容姿端正しと聞き看して、喚上げて使ひたまひき。然るに其の太后の嫉みを畏みて、本つ國に逃げ下りき。天皇、高臺に坐して、其の黒日賣の船出でて海に浮かべるを望み瞻て歌曰ひたまひしく、

沖方には 小船連らく くろざやの まさづ子吾妹 國へ下らす

最初は吉備の黒日賣の話である。吉備は神武の妻の実家があった吉備、彦島西山町である。小倉北区の高津宮から近い。神武は此处で徴兵した。集まったのが顔に入れ墨をした海部一族である。黒日賣はその一族の娘である。

(5) 境を定め邦を開きて、近淡海に制(をさ)め、

成務天皇の事蹟です。

若帶日子天皇、近淡海の志賀の高穴穗宮に坐しまして、天の下を治らしめしき。此の天皇、穗積臣等の祖、建忍山垂根の女、名は弟財郎女を娶して、生みませる御子、和訶奴氣王。一柱故、建宿禰を大臣と爲て、大國小國の國造を定め賜ひ、亦國國の堺、及大縣小縣の縣主を定め賜ひき。天皇の御年、玖拾伍。乙卯年三月十五日崩也。御陵は沙紀の多他那美に在り。(古事記・成務)

近淡海とは小倉南区曾根の海をいう。九州天皇家で「近江」「淡海」といえば小倉南区曾根の干潟の海をいう。この地域を完全に押さえたのは景行天皇である。景行はその後小倉南区に宮を建て生涯を終えました。景行の子ども倭健は「能煩野」に亡くなりました。しかし白鳥となって飛び立ち「河内國志畿」に舞い降りた。そこに陵を造り、その陵を「白鳥の御陵」と云った。「河内國志畿」とは小倉南区である。九州天皇家で「河内」はこの地を云う。倭健も父景行が居た小倉南区に飛んできたという説話である。景行の子成務天皇も淡海の志賀に宮を建てた。「近淡海に制(をさ)め」とは小倉南区高穴穗宮に於いて統治したという意味である。成務は九州天皇家の國造を定め縣主を定めた。行政上の改革を進めたという評価である。

成務の時の九州天皇家の行政区は「國」―「縣」である。「縣」は元々九州天皇家のものではなく古代九州の覇者姫氏・熊氏の行政組織であった。神武が戦ったのはこの熊氏でした。神武は畝傍山の東南に都を開き、その子、綏靖天皇は師木縣主の祖河俣毘売を娶った。既に「縣」が存在していた。成務はこの縣を再整備したのである。

(6) 性を正し氏を撰びて、遠飛鳥に勒(をさ)めたまひき。

允恭天皇の事蹟である。

弟、男淺津間若子宿禰命、遠飛鳥宮に坐しまして、天の下治らしめしき。此の天皇、娶意富本杼王の妹、忍坂の大中津比賣命を娶して、生みませる御子、木梨之輕王。次に長田大郎女。次に境の黒日子王。次に穴穗命。次に輕大郎女、亦名衣通郎女。御名を衣通王と負はせる所以は、其の身の光、衣より通り出づればなり。次に八瓜之白日子王。次に大長谷命。次に橘大郎女。次に酒見郎女。凡そ天皇の御子等、九柱なり。此の九王の中に穴穗命は、天下を治らしめしき。次に大長谷命、天下を治らしめしき。

是に天皇、天の下の氏氏名名の人等の氏姓の忤(たが)ひあやまちてるを愁ひたまひて、味白檮(あまかし)の言八十禍津日の前に、玖詞盆(くかべ)を居(す)えて、天の下の八十友緒の氏姓を定め賜ひき。また木梨輕太子の御名代と爲て、輕部を定め、太后の御名代と爲て、刑部を定め、太后の弟、田井中比賣の御名代と爲て、河部を定めたまひき。(「古事記・允恭」)

允恭天皇は八十友緒の氏姓を定め、輕部刑部河部を定めた。允恭天皇の宮の名前は遠飛鳥宮である。九

州天皇家には「飛鳥」という地名が存在した。

以上九州天皇家歴代の中で評価が高い天皇である。建国の瓊瓊杵尊、神武天皇は当然である。仁徳天皇も「聖帝」と八世紀にまで伝えられている天皇として順当であろう。成務天皇、允恭天皇は九州天皇家の行政面で大きな業績があった。国・縣の境を定めたこと。姓・氏を整理したことである。これが八世紀における九州天皇家歴代の評価である。



聖徳太子不在の意味すること

古事記は推古記で終わるので舒明以降の天皇に言及していないのはやむを得ない。しかし此処には古代最大のヒーロー聖徳太子の姿がない。日本書紀推古天皇はその内容は多く、その中心人物は聖徳太子である。もし聖徳太子が神武天皇家の皇子であったならばその伝承は他の天皇の比ではない。現在でも多くの伝承が畿内各地に現存する。古事記には推古の説話は無い。しかし聖徳太子の説話は多かったのであるから聖徳太子の説話で満たすことができたはずである。だが古事記序には聖徳太子への評価は無い。

古事記序が評価した歴代天皇の業績は九州天皇家内部の国内的なことに限られている。これらの業績は地方国家が確立していく過程で全ての地方国家が行ってきた行政組織の整備、職業身分の確立である。しかし聖徳太子の業績は当時の東アジア世界規模のものである。「仏教導入」「法興寺建立」「憲法十七条制定」「冠位十二階」「遣隋使」「遣唐使」などはいずれを取り上げてもインターナショナルな施策である。これらは現代に引き継がれ宗教・行政・外交・社会意識等の原型を形成している。そういう意味で聖徳太子は日本建国の父とも云うべき存在であろう。しかし古事記序には聖徳太子への評価がない。その理由はただ一つ。聖徳太子は九州天皇家の皇子ではなかったからである。

古事記は九州天皇家の伝承を記した史書である。古事記に説話が残るのは清寧天皇までであるがその説

話舞台は北九州である。しかし聖徳太子の説話舞台は関西である。現在でも関西各地に伝承が残り、今なお太子を偲ぶ行事が引き継がれている。しかし古事記序には聖徳太子伝が全く欠落している。この事実の一つの真実を表している。聖徳太子は九州天皇家の皇子ではなかった。

持統以前の畿内の遺跡史跡は九州天皇家のものではない。日本國のものである。662年白村江敗戦から始まる唐の占領支配、国家消滅という古代最大の危機に政権を担当した「天智」も日本國の天皇であった。また大化の改新を断行した「孝徳」も日本國の天皇であった。これらの天皇もまた九州天皇家には存在しなかったのである。

(7) 昇りて天位(あまつくらい)に即きたまひき。

天武が天位に即いたという。天位が帝位と同じ意味ならば序でことさら言及することではない。神武から天武に至るまで全て帝位に就いている。天位には特別の意味が込められている。

飛鳥の清原の大宮に大八洲御(しら)しめしし天皇の御世にいたりて、潜龍元(せんりょうげん)を體(たい)し、洊雷期(せんらいき)に応じき。夢の歌を開きて業を纂(つ)がむことを相(あわ)せ、夜の水(かわ)に投(いた)りて基(もと)を承(う)けむことを知りたまひき。然れども、天の時未だ臻(いた)らずして、南山に蟬蛻(せんぜい)し、人事共給(そな)はりて、東國に虎歩(こほ)したまひき。皇輿(くわうよ)忽ち駕(が)して、山川を凌え渡り、六師(りくし)雷のごとく震ひ、三軍電のごとく逝きき。杖矛(じょうぼう)威(いき)を挙げて、猛士烟(けぶり)のごとく起こり、絳旗(こうき)兵(つわもの)を耀(かが)やかにして、兇徒瓦のごとく解けき。未だ浹辰(せふしん)を移さずして、氣沴(きれい)自ら清まりき。乃ち、牛を放ち馬を息へ、愷悌(がいてい)して華夏に帰り、旗を巻き戈を戢(おさ)め、儼詠(ぶえい)して都邑(といふ)に停まりたまひき。歳大梁(ほしたいりょう)に次(やど)り。月夾鐘(げふしょう)に踵(あ)たり、清原の大宮にして、昇りて天位(あまつくらい)に即きたまひき。

飛鳥の清原の大宮に大八洲御(しら)しめしし天皇の御世にいたりて

大八洲とは九州天皇家の領国である。天武の名前は大海人皇子である。大を美称とすると実体は「海人(あま)」である。「海人」は「天」では九州天皇家の祖の地、彦島・天(あま)の意である。天武は九州天皇家彦島の出身であったことを暗示する。

夢の歌を開きて業を纂(つ)がむことを相(あわ)せ、夜の水に投りて基を承けむことを知りたまひき。南山に蟬蛻し、人事共給(そな)はりて、東國に虎歩(こほ)したまひき。皇輿忽ち駕して、山川を凌え渡り、六師雷のごとく震ひ、三軍電のごとく逝きき。杖矛威を挙げて、猛士烟のごとく起こり、絳旗兵を耀(かが)やかにして、

夢の中で帝業を受け継ぐ歌を聴いた。夜、川に入って帝業を受け継ぐことがわかった。だがその時期はまだ至らなかった。天武はこの時入った山を万葉集の歌で「耳我の嶺」と歌っている。「耳我の嶺」は門司区妙見山である。なぜこの山を「南山」と云ったのか。南の山という意味は当時天武の宮であった嶋宮、彦島の九州天皇家歴代の宮、橘の嶋宮を起点として南の山という意味であろう。門司区足立山・妙見山は彦島の南の山である。「雷のごとく」「電のごとく」は単なる文飾ではない。人麿の歌には「雷・電」が具体的に詠われている。

人麿高市挽歌

高市皇子尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

199 かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに畏き 明日香の 真神の原に ひさかたの 天つ御門をかしこくも 定めたまひて 神さぶと 磐隠ります やすみし わご大君の きこしめす 背面の國の 真木立つ 不破山越えて 高麗剣 和曠が原の 行宮に 天降り座して 天の下 治め給ひ 食す國を 定めたまふと 鶏が鳴く 吾妻の國の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと服従はぬ 國を治めと 皇子ながら 任し給へば 大御身に 大刀取り帯ばし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を あどひたまひ 斉ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆるまで

に ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく 取り
持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に 颯風かも い巻き渡ると 思ふまで 聞きの恐く 引き放つ 矢の
繁けく 大雪の 乱れて来れ 服従はず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消ぬべく 行く鳥の あらそふ間
に 渡会の 斎きの宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ給ひて 定めて
し 瑞穂の國を 神ながら 太敷きまして やすみしし わご大君の 天の下 申したまへば 萬代に 然しも
あらむと 木綿花の 栄ゆる時に わご大君 皇子の御門を 神宮に 装ひまつりて 使はしし 御門の人も
白袴の 麻衣着 埴安の 御門の原に 茜さす 日のことごと 鹿じもの い匍ひ伏しつつ ぬばたまの 夕
になれば 大殿を ふり放け見つつ 鶉なす い匍ひ廻り 侍へど 侍ひ得ねば 春鳥の さまよひぬれば
嘆きも いまだ過ぎぬに 憶ひも いまだ尽きねば 言さへく 百済の原ゆ 神葬り 葬りいまして 麻裳よし
城上の宮を 常宮と 高くまつりて 神ながら 鎮まりましぬ 然れども わご大君の 萬代と 思ほしめして
作らしし 香具山の宮 萬代に 過ぎむと思へや 天の如 ふり放け見つつ 玉櫛 かけて 偲はむ 恐か
れども

「雷のごとく震ひ」について人麿は詳細に歌っている。

鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆるま
でにささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく

天武の軍は「鼓」「小角」「赤旗」を装備していた。「小角」とは羊の角で作った笛であろう。当時日本には羊は居なかった。「虎が吼える」と兵が怯えるまでの大量の「小角」を天武はどこから手に入れたのであろうか。唐軍である。

天武は662年白村の日本國敗退後、唐の占領司令官が筑紫(博多)に駐屯している異常の事態下で蜂起した。この事態は天武にとっては好都合であった。天武はこの唐軍と同盟を結び「小角」を手に入れた。「鼓」も同じであろう。「雷の聲」と聞こえるほどの大量の「鼓」も天武軍が作ったものではない。現代でも太鼓を作るには木を乾燥させる所から始めると何年もかかる。「鼓」も和太鼓ではなく唐軍が使用していた肩からかける小さな太鼓と思われる。「鼓」もまた唐軍から手に入れたのである。

古事記序では天武の軍を「皇輿忽ち駕して、山川を凌え渡り、六師雷のごとく震ひ、三軍電のごとく逝きき。杖矛威を挙げて、猛士烟のごとく起こり、絳旗兵を耀かして、」と書いている。「赤旗」が兵を輝かしたというのは人麿の歌にもある。大量の赤旗が用意された。だが急造の天武軍に赤旗が用意できたとは思われない。

天武蜂起の中心の兵は東國の兵であった。古事記序も「人事共給はりて、東國に虎歩したまひき。」と書く。壬申の乱において当初から天武に従い殊勲大であった大分君恵尺(えさか)が「東國」出身の武将であった。また大分君稚臣(わかみ)も「東國」の出身の武将だった。この二人は東國の武将であったがその名前「大分」が表しているように「大分」出身の武将であった。「大分」が東國と呼ばれたのは「大分」は太宰府から見て「東」に存在したからである。九州天皇家で「東國」といえば行橋市、荻田町をさした。「大分」は荻田町に存在した古代國であった。天武の主力軍であった「美濃の師(いくさ)三千人」も岐阜県美濃ではなく周防灘に面する荻田町の古代美濃の兵であった。同じように「東海の軍を發す」と書かれた「東海」とは周防灘の海である。古代東海道とは東の海周防灘に沿って走る街道で中津街道である。

天武全国支配の始まり

九州天皇家の全国支配は天武に始まる。神武に始まる九州天皇家は北九州を統治してきた。天武は壬申の乱に勝利して初めて「天位(あまつくらい)」に就いた。天位とは日本全体の王位という意味である。其れまでは北九州の王にすぎなかった九州天皇家は天武によって初めて日本全国の支配者となった。それが「天位」である。

天皇家は神武を始祖とする九州天皇家と日本國天皇家が存在した。近畿天皇家は持統を始祖とする。それまで日本全国を支配してきた日本國天皇家は白村での唐新羅連合に敗れ存亡の危機に陥った。天武の蜂起は瀕死の日本國にとどめを刺した。日本國は百済・高句麗と同様歴史の舞台から消えていった。唐は結局極東の大国、百済・高句麗・日本を滅ぼしてしまった。日本國に代わって天武天皇家が全国を支配することになった。